このプログラムに参加して、私は自分の将来の形や向かっていく方向を明確にすることができました。まず、私は新聞記者になりたいという夢があり、高校で新聞部に入りました。その夢見る職業に近い場所で活動していく中で、新聞をつくる仕事のすばらしさを感じると同時に、日本にいるだけでは私の求める職業としての新聞記者の本質はつかめないのではないかと思っていました。起こった事象や議論される予算や法律を伝えるには日本の世界的な位置付けを知る必要があります。多面、多角的な視点を持てるようになりたい、そして何より縮小傾向にある新聞の秘める可能性を自らの手で広げて行きたいという思いがありました。

【コロンビア大学にて】

このプログラムの留学先、ニューヨークには世界最大手のニューヨーク・タイムズがあること、新聞の重要な要素である最新を届けるという点からいえば「世界の最新」を切り開いていく都市です。そして様々な人種や性別の形がある中に身を置けること、報道界の権威であるピューリッツァ―賞で有名なコロンビア大学を見学できることも私にとってはとても魅力的なものでした。

実際にジョン・F・ケネディ空港に足を踏み入れたときには、正直、ニューヨークに来ていることを、もっと言えば自分がこのプログラムに選んでもらえたことも実感が湧かなかったです。

それは２日目以降、ニューヨークを吸収していく中で自分の想像と実際のニューヨークは大きく違っていたからではないかと気付きました。まずはアメリカ人の人柄。日本人がやさしいと国際的に言われているけれど、私はアメリカ人も負けていないと思いました。例えば買い物の帰りに道があっているかマップで確認していると、通りすぎた車がバックしてきて「大丈夫か？」と声をかけてくれることもあったし、レストランで教えてもらった英語を使って注文した時、一緒にレストランに行った方が店員さんに「彼女は英語を勉強中なんです。」と言ったら「おお、それはすばらしい、私がもし同じ立場だったら、とても大変だと思う。がんばってね。」、そう声をかけてくれることもありました。歩くスピードはとても速くて、みんな忙しそうだけれど、人のためには足をとめてくれて手をさしのべてくれる人たちです。そしてそれを日本人とちがって躊躇なくできるんです。

一方で世界の最先端として発展するニューヨークは、高層ビル街に目が向けられがちですが危ない人たちともたくさん出会うことになりました。公園で座っていると、みすぼらしい格好をした男の人に物ごいをされたり、地下鉄のホームでは異臭がしたり、たくさんの人が行き交うこの地では１人で喋って怒ったり、笑いながら歩いている人がいたりします。でもそれはメキシコからの移民を受け入れることや薬物や交通、いろいろな法律が緩くて、人々が気軽に自由に暮らせる範囲を広げる「自由の街」であるためには仕方のないことかもしれません。私は一つ道を外れたらそんな人々の薄暗い空間が広がっていることを知っても、ニューヨークの信じるその考え方には学ぶものがあると思ったし魅力を感じました。

そして昔ながらの建物がたくさん残されていることにも驚きました。東京のようなガラス貼りのビルを想像していませんか？　新しい建物はくの字に曲がっていたり、なぜか４分の１がずれていたり、一工夫施してあるし、そしてたくさんの煉瓦でできたと思われる年季の入った茶色い建物が並んでいます。やはりアメリカの人々は芸術を大切にしていると感じました。今回、ニューヨークで活躍する日本人の方々にお話を聞かせてもらったとき、ニューヨークの地を選んだ理由として「可能性がたくさんある、どんな分野も活躍できるチャンスがある」、そう答えてくださった方がいました。その意味がビルのデザインにアートを取り入れたり昔ながらの建築を残したりすることで分かった気がします。そして痛切に感じてしまったのは日本という国がアメリカ、もしかしたら世界でも、キーパーソンならぬキーカントリーではなくなっているということです。寿司や昔ながらの日本

的な庭はニーズがあるけれど、アメリカは日本語を勉強する人なんてほとんどいないし、それは日本とのやり取りにメリットを感じないということではないかと思いました。

アメリカのカーマインというレストランで食事をした際、話しを聞かせてくださった方は「もう日本人で、望月さんのようにアメリカの地で成功をおさめる人はでてこないと思う」と言っていたんですね。望月さんの血のにじむような努力だけでなく、そこには高度経済成長で日本人ということそのものがアメリカにとってニーズがあったんです。日本語を話せることが会社に置いておく価値が十分にあり、それがサポートしてくれたんです。日本人の位置づけを肌で感じることができました。

でも、思っていた通り（思っていた以上に大きかったけれど）のこともありました。

まず、アメリカの食事の家にデリバリーしたピザをはじめハンバーガーやステーキ、ケーキとアメリカを象徴するたくさんの種類の食べ物を食べました。描いていたアメリカの食事そのもので口内炎が３つもできてしまいました。笑　アメリカ人にとっても量は多いようでそれを持って帰るのも文化の一つです。

そして私が行きたかったニューヨークタイムズ。高いビルと「The New York Times」のあのフォントが大きく建物にでていて、ビルの１階のロビーと外景を見ただけでも、ニューヨークに来てよかったと思えました。

また、私が１番伝えたいことは、この地で素敵な出会いがたくさんあったことです。

望月さんは車に乗ったり夕食をたべているときにアメリカの社会保障や政治情勢についてとても詳しく教えてくれました。望月さんの娘さんは、英語を話せるだけでなく、ALT の経験もあるとのことで、単語を繋げたような私の英語を理解してくれ、英語力を鍛えてくれるともに道ゆく建物や英語でのツアー中に分かりにくい部分の説明を加えてくれたりしました。

そして、望月さんのお知り合いの方々で、ニューヨークの地で活躍なさっている日本人の方にたくさんお話を聞くことができました。俳優や病院経営、老舗の美容師…アメリカというたくさんの優秀な人材の中でも日本人として世界に影響を与えている人々は共通してニューヨークの地にこだわって、アメリカにたどり着いたというわけではないということ、たどり着いたからには現地の慣習や人の在り方に合わせた商品を提供しようと努力されたこと、そして何より自分はこういう自分でいたい、という像がしっかりあるということです。私はここで新たな人生の切り開き方を知れたのだと思います。更にそれを、

高校２年生というまだ選択肢が広い今に知れたことはとても貴重な経験だし、私は自分の将来の夢がずっと前から決まっていたから、記者以外の仕事のすばらしさはあまり興味を持たずに一生を終えていたかもしれないと思うと自分の視野の狭さに驚きさえ感じました。記者として視野を広げる基礎として自分自身にもっと幅広さが必要だと思いました。私が１０日間で感じるよりもっと大きな世界をみなさんが教えてくれました。

このプログラム内での反省点はもう少し下調べをしておくべきだったということです。事前にニューヨークの本を買って、行きたいところをピックアップしていましたが、それは大体どこにあるのか、近くにいきたいところはあるの

か、どんな交通手段を使うのか、広い広いアメリカのなかではその事前知識があったらより実践的なアメリカの生活になったと思います。あとは英単語。文法ができなくても単語が言えればある程度分かってもらえるし、アメリカ人が話しているときにも単語を拾えれば文をつなげていくことができます。

いずれにしても、今回のプロジェクトでは自分の力で海外に行くよりも、たくさんの方と話し、とても多くのことを吸収できたと思います。記者をめざす私にとっては最高のプログラムでした。ニューヨークは記者だけでなく、ダンサーやミュージシャン、アーティスト、様々な分野で可能性を広く持つ都市です。

次回、このプログラムに参加する人にも自分の興味のある分野にカスタマイズして（計画の自由度が高いのはこのプログラムの良さの１つです)、見たいものを見れた感動と、偶然の出会いに隠された気付きを大切に、有意義なものにしていってほしいなと思います。

最後に、お話を聞かせてくださった方々、忙しいなか私たちに様々な学びをくれた望月さんの娘さん、娘さんのボーイフレンド、今回のプログラムで私に期待をもち、選んでくださり、全力で伝えたいことを伝えてくれた望月さんへ。最高の 10 日間を本当にありがとうございました‼ ‼ ‼